

原爆の目的は人体実験だった

I

米原爆開発計画『マンハッタンプロジェクト』の名前は、その黒幕であるバーナード・バルーク及びその計画の中心人物がマンハッタンに住んでいたことに由来する。

バルークは、ユダヤ系実業家で、巨万の富を持ち、大統領を影で動かす人物であった。彼は、レズリー・R・グローヴズをプロジェクトのリーダーに選出した。

ロスアラモス研究所の科学担当リーダー、J・ロバート・オッペンハイマーを選んだのもバルークだ。『Oppenheimer; the Years Of Risk, by James Kunetka, Prentice Hall, NY, 1982』において、著者 Kunetka は 106 ページでこう述べた。「バルークは、主席科学諮問官として特別にオッペンハイマーをすすめることに関心を示した。」

日本への原爆投下の決断を行ったのは、トルーマンであるが、彼にそれをアドバイスしたのは、国防研究委員会 (The National Defense Research Committee) であった。この委員会のメンバーには、ニューヨーク連邦準備銀行総裁ジョージ・L・ハリソンとハーバード大学総長ジェームズ・B・コナントがいた。

コナントは、第一次世界大戦の際に、毒ガスの開発に携わった。1942年に、ウィンストン・チャーチルからの委任を受けて、対ドイツ用炭素菌爆弾を開発。ドイツが早期に降伏したため、実戦使用する機会に恵まれなかった。しかし、コナントは、トルーマンの委員会において、日本への原爆投下を進言した。

他の委員として、カール・コンプトン博士と、国務長官ジェームズ・F・バーンズがいた。バーンズは、ワシントンにおけるバルークの走狗と言われていた男であり、バルークは、バーンズを通じてトルーマンを操作していた。

すなわち、対日原爆投下を実質的に決定したのは、バルークであった。

バルークが、原爆投下を決断した主な目的は人体実験のためであった。

ウィリアム・マンチェスターは、終戦直前におけるダグラス・マッカーサーの忠告についてこう述べている (American Caesar, Little Brown, 1978, p. 437)。

日本にはもう一つの動きがあった。マッカーサーは、それに気づいた数少ない人の一人であった。彼は、ペンタゴンと国務省に対して和平への動きを見逃すなど警告していた。彼は、その動きは、軍からではなく、東京から来るだろうと予測した。その予測は正しかった。日本の首都において和平を目指す人々の連帯が生まれていた。その中心にいたのは天皇裕仁自身であった。天皇は、1945年春に、国難を鎮める唯一の方法は、和平交渉以外にはないと心に決めていた。5月初頭から、日本の外交官6人からなる協議会が、連合国との和解を求める方法を模索しはじめた。代表者たちが、連合国軍のトップに対して「我々の抵抗は終わった」と伝えた。

ガル・アルペロウツは *The Decision To Use The Atomic Bomb*, by Gar Alperowitz, Knopf, NY, 1995 の 359 ページにおいて、カーター・W・クラーク准将の 1959 年におけるインタビューの言葉を引用している。

我々は、ますます多くの商船を沈め、日本人をますますひどい飢餓に陥れていた。このことだけでも、彼らに卑屈な屈服を強いることができた。我々はそれ[訳注：原爆投下]を行う必要がなかった。我々は、それを行う必要がないということを知っていた。それでも、我々は日本人を 2 発の原爆の実験のために利用した。

II

米国は、日本が降伏しそうだったが、原爆の開発が遅れていたため、わざと条件をキツくして（無条件降伏）戦争を長引かせた。

連邦準備制度が詐欺システムであることを暴いたユースタス・マリンスの THE SECRET HISTORY OF THE ATOMIC BOMB WHY HIROSHIMA WAS DESTROYED はきわめて重要な文書である。

<http://www.whale.to/b/mullins8.html>

1945年5月、国連憲章を作成するために、「宇宙の主」と自称する人々が、サンフランシスコ市パレスホテルに集合した。さらに、その主役の幾人かは、専用のガーデン・ルームに集まり、秘密の会合を持った。

この会合を呼びかけたのは、合衆国代表団長ステティニアス。会合に呼ばれたのは、合衆国大統領及びソヴェトKGBの代理人首席補佐官アルジャー・ヒス、ウォール・ストリートの法律事務所サリバン・アンド・クロムウエルのジョン・フォスター・ダレス（彼の師匠ウィリアム・ネルソン・クロムウエルは議会で活動する「職業革命家」と呼ばれていた）、特命全権大使としてモスクワにおいて2年間スターリンの戦争を指揮していたW・アヴェリル・ハリマンであった。

これら4名は、アメリカの外交に関して巨大な影響力を持つ人々であったが、憲法によって正当な権威を持つ者は、国務長官エドワード・ステティニアス・ジュニアだけであった。

ステティニアスが会合を召集したのは、緊急の問題について話し合うためであった。

日本がすでに私的に講和に向けて動き始めていたが、これは米国にとって大きな問題であった。というのも、原爆の完成にはまだ数ヶ月が必要だったからだ。

ステティニアス： 「我々は、すでにドイツを失った。もし日本が降伏してしまうと、原爆を試すための実験台を失うことになる。」

アルジャー・ヒス： 「しかし、国務長官。この兵器の恐るべき威力を認めない者は誰一人いないでしょう。」

ステティニアス： 「たしかに。だが、我々の戦後の計画全体は、原爆によって世界を恐怖に陥れることができるかどうかにかかっている。」

J・F・ダレス： 「この目的を達成するには、数字が必要だ。私は百万人（の犠牲者）が適当だと考える。」

ステティニアス： 「そのとおり。我々は、百万人を希望する。しかし、もし彼らが降伏してしまうと、すべては台無しになる。」

J・F・ダレス： 「だから、どうしても原爆が完成するまで戦争を引き伸ばさなければならぬ。」

ステティニアス： 「心配はない。無条件降伏。日本人は受け入れないだろう。彼らは、天皇を守るために誓いを立てているから。」

J・F・ダレス： 「まさにそのとおり。あと3ヶ月間日本に戦争を継続させるべきだ。そうすれば、諸都市に対して原爆を使用できる。我々は、この戦争を、世界のすべての人々をむき出しの恐怖にさらした状態で終結させなければならない。そうすれば、彼らは、我々の意思に従うようになるだろう。」

国連憲章の作成のために集まった人々が、原爆投下のために日本に無条件降伏を突きつけ、戦争の引き伸ばしを図った。

トルーマンに原爆投下にゴー・サインを出させたバーナード・バルークは、戦後、国連原子力委員会の米国代表に任命され、核兵器廃絶のために活動する。核兵器の国際管理、査察、違反への罰則の制定を推進した。

国連が平和のための機関であるということほど真理から遠いことはない。

III

苫米地英人という脳機能学者の最近の著書『洗脳支配—日本人に富を貢がせるマインドコントロールのすべて』という本の中で興味深い事実が紹介されている。

アーネスト・ヒルガード(1904-2001)という催眠学者でスタンフォード大学教授が 2001 年に没した際に、スタンフォード大学が追悼文を発表した。

功績のひとつとして、「戦後日本の教育の非軍事化のため」に GHQ の招請により来日したことが挙げられていた。

催眠学者がなぜ日本の非軍事化のための教育に一役買わなければならなかったのだろうか。

苫米地氏は、即座に理解した。

「戦後占領下の日本で、GHQ が WGIP を徹底的に推し進め、日本人に戦争犯罪人として罪の心をこれでもかと刻み込んだことは、公文書として残っている事実で」あり、それはまさしく催眠学者の指導のもとに実施された洗脳であったと。

原爆投下の理由について、新型爆弾である原爆を当初、米国の原爆を開発した科学者たちは、呉などの軍港の、それも沖合いに投下するという説明を受けていました。それを、当時の米国軍部は原爆の威力を測定する意味合いで、都市部に落とすことに変えました。人体実験を目的として日本に落とすと言えます。このことは、残された米軍の資料など、さまざまな証拠から明らかになっています。

ところが日本人の多くは、「第二次世界大戦を早く終わらせるために、アメリカは日本に原爆を投下せざるをえなかった」と教育され、いまだにそう思い込んでいます。

実際、昭和 20 年の東京大空襲など、一連の空爆による日本全土焼き払い作戦のときから、米軍部は日本に戦争遂行能力がないことをはっきりと知っていました。日本全土を焼き払うこと自体、すでに人体実験です。一般市民が無差別に死んでいくなかで、戦争の恐怖がどのように天皇を頂点にした国家を変えていくのか、研究していたのだと私は見ています。そして、その次に原爆投下です。敗戦前の少なくとも半年の間、日本人は国ごと一部の米国人の実験用モルモットとして、やりたい放題に殺されたというのが歴史の事実です。

<http://www5.plala.or.jp/kabusiki/kabu165.htm>

前代未聞の大量虐殺を行い、それを隠すための思想操作。
科学の力をフルに利用して、まさにやりたい放題のことをやった米国。
神の裁きがくだらないはずがない。

IV

米国上院軍事外交委員会におけるマッカーサー証言

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~asakyu/macarthur.html>

上院議員ヒッケンルーパー：では五番目の質問です。中共(原語は赤化支那)に対し海と空とから封鎖してしまへといふ貴官の提案は、アメリカが太平洋において日本に対する勝利を収めた際のそれと同じ戦略なのではありませんか。

マッカーサー：その通りです。太平洋において我々は彼らを迂回しました。我々は包囲したのです。日本は八千万に近い膨大な人口を抱へ、それが四つの島の中にひしめてゐるのだといふことを理解していただかなくてはなりません。その半分近くが農業人口で、あとの半分が工業生産に従事してゐました。

潜在的に、日本の擁する労働力は量的にも質的にも、私がこれまでに接したいづれにも劣らぬ優秀なものです。歴史上のどの時点においてか、日本の労働者は、人間は怠けてゐる時よりも、働き、生産してゐる時の方がより幸福なのだといふこと、つまり労働の尊厳と呼んでもよいやうなものを発見してゐたのです。

これほど巨大な労働能力を持つてゐるといふことは、彼らには何か働くための材料が必要だといふことを意味します。彼らは工場を建設し、労働力を有してゐました。しかし彼らは手を加へるべき原料を得ることができませんでした。

日本は絹産業以外には、固有の産物はほとんど何も無いのです。彼らは綿が無い、羊毛が無い、石油の産出が無い、錫が無い、ゴムが無い。その他実に多くの原料が欠如してゐる。そしてそれら一切のものがアジアの海域には存在してゐたのです。

もしこれらの原料の供給を断ち切られたら、一千万から一千二百万の失業者が発生するであらうことを彼らは恐れてゐました。したがつて彼らが戦争に飛び込んでいつた動機は、大部分が安全保障の必要に迫られてのことだつたのです。

V

GHQの占領目的——日本の悪魔化

占領軍の日本占領政策の一つと言われる 3S 政策（スクリーン、スポーツ、セックス）は、シオン議定書に書いてあるのとまったく同じ。

マッカーサーの宗教であるフリーメイソンが背後にいるのは明らか。

フリーメイソンは、ルシファー（つまりサタン）礼拝のシステムである。

中世の魔女やイギリスのフリー・メイソンは、ルシファーを「ニムロデ」と呼んだ。ニムロデは、天に昇ろうとした「内在神」の奮闘を表す一般的な用語である。…ルシファーは、ニムロデと同一と考えられる。ほとんどのフリー・メイソンたちは、ニムロデとバベルの塔が[もともと]、(メイソン) クラフト神話における基本の一つであると知って驚くだろう。…我々の創始者であり、最高のグランド・マスターは、あの有名な[悪名高い]塔の建設者、ニムロデ王本人であると断言されている。当時の活動的メイソンたちに最初の「命令」を与えたと言われるのは、ソロモン王ではなく、ニムロデなのである。

<http://www.islamicparty.com/commonsense/19mason.htm>

つまり、「最高のグランド・マスター」 = 「ニムロデ」 = 「ルシファー」 = 「サタン」。

1944年に米国陸軍長官ヘンリー・L・スティムソンの任命により、1941年の真珠湾攻撃に関する調査を担当したヘンリー・C・クラウゼンは、後に米国南地区のスコティッシュ・ライト最高評議会の最高総司令官になった。

彼は、著書 Pearl Harbor: Final Judgement (1992年)において、マッカーサーが日本占領の目的をどのように考えていたかについてこう証言した。

．．． マッカーサーが私にいくつか個人的な質問をしたので、「戦争が始まった頃、私はカリフォルニアのメイソニック・グランド・ロッジのグランド・オラターでした」と答えた。そして、後にトルーマン大統領にもそうしたように、33 階級のスコティッシュ・ライト・メイソンになったことに祝辞を述べた。

彼は、それから 1 時間ほど私を執務室に引き止め、極東においてフリーメイソンの道徳的原理をどのように広めるべきか語った。・・・マッカーサーは、「日本に着いたら、将来の憲法からこの規定（フリーメイソン禁止の規定）を取り除くつもりだ」と述べ、実行した。

(149 ページ)

GHQ の日本占領の目的は、「フリーメイソンの道徳的原理を広める」ことにあった。

フリーメイソンの道徳的原理とは、すなわち、ルシファーの道徳原理。

つまり、GHQ は、日本を悪魔化することを目的としていたのだ。

GHQ は、教育勅語を廃棄するために非常に熱心に活動した。

日本を長期的に滅亡させるには、まともな道徳を説く教育勅語が邪魔者であったからだ。

戦後の日本には教育勅語がないから、「夫婦相和」せず離婚率が高いのです。「朋友相信」がないから、「いじめが」絶えないのです。「博愛衆に及ボ」さないから、電車で老人に席を譲らないし、「一旦緩急あれば義勇公ニ奉ず」る精神が失われたから、「利己的な人間が増え国全体の名誉が蔑ろ」にされてしまうのです。(台湾と日本がアジアを救う 許 國雄著 明成社)

このようにして戦後日本は墮落「させられた」！

VI

太平洋戦争開戦通告遅延の真の理由

文芸春秋（2003年12月号）に斎藤充功氏が『真珠湾「騙し討ち」の新事実』という題の文章を寄稿しておられる。

日本が宣戦布告前にパールハーバーを襲った舞台裏には、ワシントンの日本大使館の不手際があったことは広く知られているが、その裏に隠された事実があったという。

1941年12月7日午後1時25分（ワシントン時間）に、南雲忠一中将率いる日本海軍空母起動部隊は、ハワイ真珠湾に停泊中だった米国の主力戦艦を攻撃した。

しかし、ワシントンにいた駐米大使の野村吉三郎がハル国务長官に最後通牒となる「通告文」を手渡したのは、7日午後2時20分（ワシントン時間）のことで、55分も経過した後だった。

このため、日本は、アメリカに「騙し討ち」と言わせる隙を与えてしまい、その結果、必ずしも一つにまとまっていたわけではなかった米国民を「リメンバー・パールハーバー」の掛け声の下、一致団結させてしまった。

なぜ野村大使による通告文の手渡しが遅れたかといえば、従来の説では「大使館員の清書が手間取ったため」であるが、実は、別の理由があったという。

諜報員として米国に派遣され、12月4日に急性肺炎により死去した陸軍主計大佐・新庄健吉（享年45歳・クリスチャン）の葬儀がワシントンDC市内のバプテスト教会で執り行われ、野村・来栖両大使がそれに出席したが、牧師のメッセージが予想をはるかに越えて長時間に渡り、中座できなかったためだった。

当時「条約」担当であり、葬儀に同席した松平康東一等書記官（*）の証言：

「…（葬儀は）短時間の予定でしたが、司式するアメリカ人の牧師が、新庄大佐の高潔な人格を賛美して、長々と告別の辞を述べるので、気が気でならず、中止してもらいたい、と思うものの、それも出来ず、気があせるばかりでした。というのは、その日の午後一時には『国交断絶のやむなきに至った』旨を野村大使に同行して、ハル国务長官に最後通告に行く予定になっていたからです、行くにもいけない。それで、

時刻を遅らせて面会する以外にはありません。アメリカ人の牧師は、新庄大佐が自作された美しい英詩を、次々に順次に朗読し、どんなに年齢と共に精神的な成長をなされたかを、ノートを取り出して読みながら述べて、口を極めて遺徳を頌めたたえるのでした。

その時『ハワイの真珠湾を日本が攻撃中』の無電が入って来ました。でも、あまりにも美しく感動的な説教が続くのが印象的でして、聴き入る上官たちに『葬儀の中止』を耳打ちするのですが、黙って終わるのを待っておられました。私は和戦交渉の担当官として、あんなに気をもんだことはありませんでした。

葬儀が終わるや否や、野村、来栖の両大使は国務省にむけ、フルスピードで自動車を走らせ、ハル国務長官に面会して、日本の最後通告を伝えたのですが、ハルが『無通告の奇襲攻撃』と激怒したのも当然ですが、実は事後通告となった舞台裏の事情は、アメリカ人牧師が長々と悼辞を述べたからなのでした。…」（出典『新庄健吉伝』著者稲垣鶴一郎が「原始福音」一七七号から転載したものを引用）（146 ページ）

さらに、戦後十年を経た昭和 30 年秋、自民党参議院議員となっていた野村吉三郎から新庄健吉夫人の範子のもとに突然届いた一通の書簡には、「新庄の葬式の間に関戦となった」と記されていた。

「…開戦当時の事は尚昨日の如く頭に残りおり故大佐の葬式には米国の陸軍将校も多数参列、式の間に関戦となった次第にて当時のことは夢の如くに有之候」（書簡は写真とともに『新庄健吉 追憶記』に紹介されている）（150-151 ページ）

大本営政府連絡会議の 12 月 6 日の会議において、最後通牒の「手交の時間」がワシントン時間 7 日午後 1 時と決定され、伝えられていた。

それにもかかわらず、なぜ野村大使の手渡し大幅に遅れることとなったかは、実は、この葬儀での牧師のメッセージの遅延にあったのだ。

45 歳で突然亡くなった新庄大佐の本当の死因を調べる必要があるだろう。そして、なぜ 4 日に死亡したのに、葬式が開戦まで秒読み段階に入った非常時の 7 日に行われたのか、また、なぜ野村・来栖両大使がその葬儀の日程を受け入れ、それに参加したのか。

（*）この証言は、クリスチャンであった松平が、「神の幕屋」の手島郁郎と機関紙『キリスト聖書文化 原始福音』（第 177 号）誌上で対談した中で述べられたものである。「幕屋」はこの号を永久部外秘扱いにし、一切の閲覧を認めていないという（145 ページ）。

VII

新庄健吉と国際金融資本

すでに述べたように、太平洋戦争開戦通告の遅れの原因は、新庄大佐の葬儀に出席した野村・来栖両大使が、牧師の長々しい説教に付き合っただけで遅刻したからだ。

ある人は、「このような情報は戦没者に対する侮辱である」というが、問題をはきちがえている。

いかに外務省が無能であっても、戦没者の死とはいかなる関係もない。

電報の清書に手間取ったことが理由であっても、愚かな失態という点では同じである。

さて、この新庄健吉という人物について浜田政彦氏が興味深い情報を提供されている（『神々の軍隊 VS 国際金融資本の超暗躍』（徳間書店、2008年6月））。

彼は陸軍経理学校を首席で卒業した秀才であった。陸軍三等主計（少尉）としてシベリア出兵に参加。そこで、ロシア革命を目撃し、ボルシェビキの原動力であるマルクス主義に注目。帰国後、本格的に研究を開始した。

東京帝国大学に陸軍派遣学生として経済学を学び、大学院にまで進んだ。帝大を修了した新庄は陸軍省において、軍事研究員としてソ連・東欧・ドイツ・フランス・イギリスなど各国を渡り歩き、これら国々の経済・金融事情を徹底的に研究した。その中で彼はある事実気づいた。

そして新庄は、敵国間の背後に、イデオロギーの対立を超えて暗躍する一つの勢力の存在に気づくのである。この勢力は、思想や文化ではなく「貨幣」を唯一の拠り所とする、無国境な国際金融資本であった。

“彼ら”は国際通貨を基準として世界を飛び回り、この動きにあわせて各国政策に影響を与えていたのである。その無機質・無表情・無感情な得体の知れぬ在り方は、新庄健吉を戦慄させた。（148 ページ）

つまり、世界の事件の背後にイルミナティの存在に気づいたというのだ。さらに研究を続け、ロシア革命の背後にも彼らの影があると分かった。様々な分野の資料を徹底的に集め、彼らについて詳しく分析した。そして、ある重大な結論に達したという。

新庄は、経済・金融に関する各国の具体的な資料やデータを徹底的に集め、国際金融資本について分析した。その結果彼は、恐るべき結論に行き着いた。それは彼らが日本を狙っている、という結論だった。“彼ら”は日本を満州から引きずり出して中国に侵攻させることで、日本を泥沼に引きずり込もうとしていたのである。そしてこの計画の最終目標は、日本をアメリカ（ウォール街）も含む全面戦争へと追い込むことであった。（同）

予想どおり、昭和 12 年 8 月、日中戦争の勃発を契機に国際金融資本との全面戦争が始まった。戦争が始まると、金融通の新庄は支那派遣軍経理部高級課員として大陸に派遣され、現地で日本軍の通貨工作を担当、国際金融資本と通貨競争を戦った。だが国際金融資本の信用を後ろ盾にする蒋介石側の通貨は強く、日本の軍票は完全に敗北した。

欧米金融資本は、彼らの傀儡である蒋介石を通じて、日本を戦争の泥沼に引きずり込み、疲弊させ、そして、最後のこれまた彼らの傀儡である毛沢東率いる中国共産党という駒を切り札として出す計画であった。

この計画について知っていたのは、日米の、当時リベラルといわれた知識人たちであった。彼らは IPR（太平洋問題調査会）というロックフェラー財団をスポンサーとし、外交問題評議会（CFR）に誘導されていた組織を通じて、「互いに連絡し合い、中国大陸における問題を協議しあっていた」。「CFR は、ロスチャイルド財閥の息がかかった RIIA（王立国際問題研究所）と提携していた」。

このような罫が仕掛けられているとは知らない日本軍部は、同じく国際事情に通じていない新興財界人たちの後押しによって、ずるずると深みにはまっていった。蒋介石の物資輸送ルートを断つために、軍は、積み上げ地がある北部仏印に進駐した。

これがうまくいくや、今度は眼前の南方油田に目がくらみ、南部仏印進駐を強行、これが裏目に出て、ウォール街とシティに日本攻撃の大義名分を与えてしまうこととなった。

アメリカ（ロックフェラー財団のスタンダード石油）とオランダ（ロイヤル・ダッチ・シェル石油）はただちに対日全面禁輸に踏み切り、アメリカ（ウォール街）とイギリス（シティ＝ロスチャイルド財閥）は日本の対外資産を凍結した。これによって追いつめられた日本は、いやが上にも対英米戦争へと突入せざるを得なくなったのである。（151 ページ）

そしてついに、指導部の対米戦争回避の願いむなしく、全面戦争に突入した。

新庄は、昭和 16 年 1 月、突然アメリカ行きを命じられた。「任務は米陸軍の軍事研究員として赴任し、アメリカの軍産複合体と、その背後のウォール街の真意を探るというものであった。」

三井物産ニューヨーク支店を拠点に、新庄は活動を開始した。

国際金融資本について熟知する新庄は、日本を滅ぼしかねない日米全面戦争を回避させ、和平の一翼を担うべく動いていた。だが……。

昭和十六年十月二十一日、新庄は突然倒れて昏睡状態に陥ると、十二月五日、帰らぬ人となった。新庄の葬儀は、皮肉にも真珠湾攻撃の日、十二月八日であった。（152 ページ）

こう見てくると、新庄は「知りすぎた男」だったのではないかと思う。おそらく死因は暗殺によるものだろう。

葬儀が開戦日に行われるように、その数日前に殺された。野村・来栖の足止めをするためだ。日本は最後の最後までおもしろいように、国際金融資本家の筋書き通りに動いた。

日本を国際金融資本家から守るために働いた彼が悲劇的なことに、彼らの野望を成就するために利用されてしまった。

しかし、これも悪魔が活躍することを許された時代だからだと思う。今このような事実が明るみに出てきているということは、神がその時代を終わらせようとしているということのしるしであろう。ちなみに、新庄はクリスチャンである。